

Maple Letter(10)

ジングルベル、ジングルベル、鈴が鳴る♪♪!! トナカイの鈴の音はまだ聞こえてきませんが、クリスマス気分には街は覆われています。クリスマスには、誰もが実家に戻り、家族でお祝いのご馳走を食べ、贈り物の交換をします。

イエスキリストの生誕の日ですから、教会はミサをイヴにしたりと大忙しにします。外の飾りつけは厳かに、美しくされています。やはり、カソリックの町だとこの時は頷いてしまいます。賑やかなダウンタウンは、光り輝き、商戦に明け暮れ、大きな買い物袋を抱えた客の出入りが引きをを切りません。掻き入れ時です。

以前は手編みのセーターだったり、手作りの贈り物が多かったようですが、今は豪華絢爛、ありとあらゆる物を買う時代になったようです。子供へのサンタさんからの贈り物ではなくなり、家族全員への贈り物の時代になりました。

我が家のドリトル先生は、パリの敬虔なカソリックの家に育ちましたから、教会で清めてもらったキリスト生誕の場面の人形が飾られます。クリスマスツリーも飾られ、贈り物はその根元に置かれています。これが定番の我が家のクリスマス風景です。おととと、忘れていました。何よりも大きな位置を占めているのが、シャンペンを入れたクーラーバケツです。家族が集まる日に、ここどさっと雪を入れて冷やそうと思っています。

「君、何しているの」

ドリトル先生は華やかにどでかい星をツリーのてっぺんにつけようとしている私に、恐怖の叫び声を上げるのでした。

「大きい星の方がいいじゃない。タイムスクエアのツリーみたいに」

「君、もっと厳かに、密やかに。これは、ベツレヘムでのキリストの生誕の場所に三博士を導いた星なんだから、」

「あら、そうなの？」

「それから、この飾り付けの玉はね、彼らの贈り物を意味してるんだ。」

「あら、そういえば黄金を持ってきた博士もいたわね。では金の玉をしこたま飾ろうかしら。少しはあやかりたいものだわ。そういえば、あなたが飾った、マリア様に見守られた、生まれただけのキリスト様だけど、生徒が、「和子ー!! キリストは25日に生まれるんだから、まだ飾っちゃだめ」って叫んでいたわよ。」

「まあ一、厳格に言えばそうだけど。いいでしょ、可愛いんだから多少ごまかしたって。早めに飾って楽しみましょう。」

「ドリトル先生、質問があります。」

「何でしょう？」

「クリスマスツリーだけど、当時、ベツレヘムにはもみの木なんて、なかったんじゃない？」

「なかっただろうねえ。明らかに後世作り上げたという感じかなあ？まあ、綺麗だから良いでしょう。」

今年の我が家もクリスマスツリーは、豆電球の色はブルーを主にし、わずかに緑が入り、てっぺんには小さめの星を付けてみました。家族の集まりは、イヴの日からマルチニクにバカンスに出かける次男一家の都合に合わせて、23日にすることになりました。

「神様の生誕をバカンスの都合に合わせてとは何事か」

カソリックのドリトル先生は、ひどく不機嫌ですが、ご時世でしょうか、無宗教の子供達には、贈り物には執着があっても、キリストの生誕にはあまり関心がないようです。

外はマイナス20度、ホワイトクリスマスの年の瀬となりました。良いお年をお迎えください。